

三つやの巻

攝取の巻

光明攝取(元祖大佛御法語解説)……………一
 名号佛種子……………二六
 至誠心……………二七
 内容(向位)―信愛欲……………二九
 欲生……………四三
 人生を充実す……………四九
 欲望に願作佛心と願度生心との二……………五二

光明攝取(元祖大佛御法語解説)

觀無量壽經ニイハク、一々ノ光明遍ク十方ノ世界ヲ照シテ、念佛ノ衆生ヲ攝取シテ、捨テ給ハズ。已上。コレハ光明、タゞ念佛ノ衆生ヲ照シテ、餘ノ一切ノ行人ヲバ、照サズトイフ也。但シ餘ノ行ヲシテモ、極樂ヲネガハバ、佛光照シテ、攝取シ給フベシ、イカバ、唯念佛ノ者バカリヲ、撰ビテ、照シタマヘルヤ。善導和尚釋シテ、ノタマハク、彌陀ノ身色ハ金山ノ如シ、相好ノ光明十方ヲ照ス、唯念佛ノ者ノミアリテ光攝ヲ蒙ムル、當ニ知ルベシ本願最モ強キヲ已上。念佛ハコレ彌陀ノ本願ノ行ナルガ故ニ、成佛ノ光明カヘリテ本地ノ誓願ヲ照ラシ給フ也。餘行ハコレ本願ニアラザルガ故ニ、彌陀ノ光明キラヒテ照ラシ給ハザルナリ。今極樂ヲ求メン人ハ本願ノ念佛ヲ行ジテ、攝取ノ光ニ照サレント思食スベシ。コレニツケテモ、念佛大切ニ候、ヨク／＼申サセ給フベシ。

斯經の文は觀經一部の宗とする處、吾宗には最も大事の法門である。爰に吾祖、深く彌陀の願意、釋尊の本意を悟り給ひ、本願の光明は唯念佛者のみを照して、餘の隨緣の雜行をば照し給はざる眞理を看破し給ひ、尙善導大師の釋文を引いて自己の所信を證し、終始一貫念佛を以て徹底せよとの御示である。

欽しみ惟ふに、吾祖、念佛の法門に於て悟達すること甚深、言々悉く證入の分齊より流出す。予聊か卑見を以て玄を搜り義を窺がひ解釋を試むること左の如し。

一、彌陀の光明と衆生の念佛。二、本願の意義。三、本願の力。四、如來の光明を太陽の三線に例す。五、彌陀の光明唯念佛者のみを照す所以。六、本願の三心と光攝の三緣。七、餘の行人を照さざる所以。八、欣淨の爲にも余は照さざる所以。九、彌陀靈的人格現。十、光明念佛者を攝取して捨てざる所以。十一、極樂に生るゝ資格を造る。十二、唯念佛の一行を以て勸結す。

一 彌陀の光明と衆生の念佛

觀無量壽經ニ曰ク、一々ノ光明遍ク十方ノ世界ヲ照シテ念佛ノ衆生ヲ攝取シテ捨テ給ハズ。コレハ光明タゞ念佛ノ衆生ヲ照シテ餘ノ一切ノ行人ヲバ照サズト云也。通じて宗教は神人合意または生佛感應等の語を以て意義を表はしてをる。佛は大悲の父にて衆生は其子である。大悲の父から子等が佛性を育む靈力が即ち光明なので、其光明を獲得する妙行が即ち念佛である。今の經文に正しく宗教の定義を示されてをる。宗教心即ち信仰は、佛の恩寵(光明)と衆生の信仰(念佛)との合意し融合する處に成立するものとす。華嚴經に譬へば日光あり眼ありて能く物を見るべき如く、佛の光明と衆生の信念とに由つて信仰は成立するものであると示されてをる。佛心と衆生心との合一調和して最も親密に爲り、一體不離の關係を爲す妙行が即ち念佛三昧と名づく。佛の光明と衆生の信念との兩者を切り離して宗教心は成立つものではない。けれども説明には暫らく能攝の彌陀の光明と所攝の衆生とを分けて説くことが便利である。依つて初めに彌陀は甚變なる靈體に在ます哉、又光明とは甚變

なるものなる哉に就いて説明せん。

二 本願の意義

彌陀とはいかなる靈體に在ます哉。曰く、大原談義に曰く、彌陀は十方三世慈悲の體と、宗祖は判じ給へり。實に彌陀は諸佛慈悲の體たると共に、一切衆生の大慈の父である。慈父なる彌陀は衆生が本覺の御許を離れ遠く迷妄の他郷に彷徨ひ、生死極な輪廻休むことなきを恐れみ、諸佛の慈悲を代表し、迹を法藏の因位に垂れ、獨り超世の大願を建て、六道貧窮の衆生の爲に大施主となりて、永遠の大安に濟はんと誓ひ給ひぬ。一々の誓願は悉く衆生の爲にと、普く攝取して同じく佛道を成せしめ、永恒常住の涅槃に入らしめんとの聖意を現はし給へり。之に由つて見れば、本願とは便ち大慈の父が一切の子等をして、自己と同じく無上の佛位に成さしたいとの願望である。例へば世の父たるもの我子を養ふて第二の我とし吾がすべてを譲り我が位置を紹がせたいのが目的たる如く、彌陀は一切子等が伏能を開き佛子の眞面目を顯はし、父の全き如くに完からしめたいと云ふ本願である。云ひ換ふれば彌陀の本願とは衆生をして佛子佛心全き人格とし佛とし佛と成らしめたいとのみである。

三 本願の力

大悲の父が一切の子等をして、父の全き如くに圓滿なる佛に爲さんとの願望が本願とすれば、慈父はいかなる靈力を以て一切の子等を長養して其願望を果さんと爲し給ふや。世間の父たるもの其子の體育知育を爲すには資力がなくては應はぬ如く、慈父なる彌陀は甚饜なる資力を以て衆生を攝取し靈化し給ふ哉。曰く、彌陀が衆生を攝取し靈化し給ふ靈力即ち本願力である。是を光明とも亦は不可思議の功德力とも云ふ。名は異にして體は同一なり。即ち彌陀の大靈力である。喩へば太陽のエネルギーが地上の一切の動物や植物を生成養育する力なる如く、彌陀の光明は遍ねく十方世界を照らし、衆生の心靈を靈養靈化なさる靈力である。

四 如來の光明を太陽の三線に例す

太陽は物質界の萬物を照らして養成の能力を爲す。彌陀は心靈界を照して衆生的心灵を靈養し給ふ靈力を有す。今暫く如來の靈光を太陽の光、熱、化の三線に比例して智慧と慈悲と威神との三靈能あることを明せば、但し靈力は衆生の知力と感情と意思との三面に對して知見を興へ、苦を抜き樂を興へ、惡を轉じて善に化せしむる功能である。之を分類して説明せば傍やうである。

(1) 如來の智慧は太陽の光線に比す。

喩へば太陽が出づると世界が一體に明るくなり、山河大地乃至一切の萬物が悉く能く見えて來る如く、如來智慧光が明け來れば、衆生の佛知見が開けて、淨法界の一切の靈的萬象が朗らかに觀ることが出来る。斯觀經に説き給ふ處の淨土の衆寶莊嚴の相とか亦佛の相好光明等を觀るといふは如來の智慧の中に衆生の知見が開けて見ゆるのである。如來の智慧光を被むれば佛の相好等を瞻む許りでなく、佛の聖意をも見ることの得らるる經に示されたり。即ち佛身を見る者は亦佛心を見上らむ佛心とは大慈悲是なりと。此に心得べきことは、すべて如來の境界は肉眼にて感覺すべきものではない。直覺的に自己の心靈に觀すべき靈境である。經に「如來是法界身、入一切衆生心想中」と。喩へば肉眼開く時は萬物悉く見ゆる如く、心眼開く時は佛の靈境界の相を皆み知見することが出来る。或は無生忍を悟り、又は總持門を得る。乃至一切の佛法を自ら明かに悟る等の働きは、如來の智慧光が人の知見と現はれしに外ならない。

(2) 如來の慈悲を太陽の熱線に例す

太陽は明るいといふ外に又熱線がある、故に太陽が出ると地上が溫暖となる。夫は熱線から發する處の能力である。總ての動物やまた植物の生存し得らるゝのは此熱線からである。如來の慈悲に衆生の心靈が溫暖らるれば苦が抜ける自づと樂しくなり。而して靈的活動の原動力ともなる。人の心の溫暖なるものは慈悲である。世の中に他人の苦惱に對して怒りも同情もなき族を冷たい人と呼ぶ。彌陀は大靈的溫暖なる靈界の太陽なので、光明遍ねく天地に充ちて在すから我等が其中に浴込んで了へば世

の憂悲苦惱も自から消失せる。世には唯肉の幸福のみを追求め焦つて現在の満足を捉へんとする輩が多い。實は比々皆然りであらう。然るに此世界は彼等が希望を思ふまゝには容れて呉れぬ。夫が爲に彼らは終身煩惱の奴隸と爲つて、生涯を煩惱の墓に葬むつて了ふのである。若し夫れ自己の奥底に潜める靈性が開顯して大慈光の生活に入る時は、求めざるに自から靈福を享受する事が得らる。實に眞の幸福は肉の我ではなく佛子と云ふべき靈き我となりて始めて得らるゝのである。然るに人は初めは煩惱の我許りなので靈き我は未だ卵子である。

其が大悲の懷に煖ためられて、解化する時に始めて我が眞の佛子となる。また譬へば春日温暖なる和氣が霏々として百花を綻ばす如くに靈なる煖氣遍なく渡れり。斯の慈愛に觸る者は心靈の蕾が綻びて奇しき色と馨ばしき香を發するに至るのである。世に心靈の花ほど美なるものはない。されば佛は、人中の芬陀利華と稱譽し給ふた。無縁の大慈は遍なく法界に充滿てり。斯慈愛に觸るゝ人は眞實勝妙の樂が感じらる

其靈氣の中に融け入らば愛世の苦惱も覺えずなりぬ。我々が聖名を稱へて心神が彌陀の慈愛に抱擁せらるれば、法喜に充され、身も心も安らけく、禪悅の中には三昧の妙味極まりなきを覺ゆ。太陽の熱に依りて我々が肉は活ける如くに、我等が靈は彌陀の大慈悲によりて永遠に活けるのである。

(3) 威神力は太陽の化學線に例す。

如來の威神力または靈化の力と云ふは、是太陽の化學線に例すべきものにて、人の意志を善化する作用である。太陽のエネルギーが化學作用を起して、地上の植物や動物を長養化育するやうに、彌陀の靈力が衆生の心靈を増長靈化するの増上縁となる。

衆生は本法身から受けた佛性を持つてをる。然れ共動物我なる罪惡の皮鼓に包まれて顯動することができぬ。一心に念佛して彌陀の大威神力加はる處に、内的の靈性は漸くに發育して光明に育まれ、順ては心の花開きて從來の煩惱我は轉じて、聖き人と爲り眞の佛子と生れ更り、人格が革新して光明の生活に入るのである。

又斯の光明は衆生の煩惱を靈化する。人には通じて貪瞋痴等の諸の煩惱と云ふ弱點を有つてをる又種々の形氣の質が有つて、其の爲に人格が圓滿に成ることができぬ。然るに此光に觸るれば煩惱も氣質も靈化せられて圓滿なる人となること、喩へば溢柿の果も、日光に乾燥せられて甘柿と爲るが如く、人の煩惱は若し轉化するときは選つて道心と爲り、惡き我は善き我と爲り、人の子が佛の子と靈化する。是斯の光明の働きたる。世界の總ての生物は、太陽のエネルギーを離れては生存することのできぬ如くに、彌陀の靈力なる光明を離れては成佛することができぬ。故に般舟讚に三世諸佛は皆念佛三昧に由て正覺を成すと、此義である。

五 彌陀の光明 唯念佛者のみを照す所以

如來の光明は遍なく十方世界を照して、唯念佛衆生のみを攝めて捨てぬと云ふに就いては、深き元因あり。其所以は先に演べし如く、彌陀の本願は、慈悲の父が總ての子等を靈化して、父の全き如くに全き佛と成らしめんとするにあり。要する所、唯靈き人格を作るにあり。眞の佛子と爲すにあり。然して念佛は父子合意の故に、生佛親縁の故に、佛願に順するが故に、乃至種々の因縁ありて、唯念佛者のみ光攝を被むるのである。

大悲の父は唯吾子をして全く自己を繼續せしめんとするにあり。念佛者のみ眞の佛子とし全く如來を我父とし、念々に慈父の恩寵を憶念して止まぬ。

又母の哺乳に由つて子は養はるゝ、如く念佛者は母子的の如き因縁を以て靈性養育せらる。親子の親密なる因縁 餘の行人との比較にあらず。彌陀の光明は常に明るゝを與ふるのみでなく心靈を養育する靈力なれば、念佛者は全く彌陀の子なるが故に、彌陀の法乳に養はるゝことに適當せり。親子の靈的内容に於て、實質が全然同くなる故である。人の子を育てるに、牛羊等の乳よりかは母乳を哺するが適當せる如く、念佛の安心の衆生には念佛三昧を以て、彌陀の光攝にて靈性を被むるのが、能く相應してをる故に、唯念佛者のみを照し給ふ。

六 本願の三心と光攝の三縁

一一

彌陀の光明遍なく照せども、念佛の衆生のみを攝取するに三縁あることは、導師の釋し給ふ處、三縁とは近縁、親縁、増上縁、とにて此三縁と、また十八願の信、樂、欲、との關係のあることを明して見んか。

(1) 深く信じて念佛すれば近縁と爲る

彌陀の光明遍なく照して渾らぬ限なし。衆生一心に念佛する時は、信心水澄淨す。信心水澄む時は佛の影映す。感應同交して衆生信心の中に彌陀常に現在す。導師曰く衆生佛を見んと欲せば即ち目前に現じ給ふ故に近縁と名づく。

實には如來智慧の光明は太陽の光の如くに遍なく照り渾らぬ限はない。衆生未だ信心の眼が開けぬ故に知ることができぬ。信心開發する時は謂ゆる天地一枚板、自己の直觀が即ち如來の心光である。如來の大智光明と自己の眞智と無二無別、是父子體の智體である。眼を見ず、信心を知らず。如來の心智と衆生の信心とは日光と眼目との關係の如く、其近縁なること電子を容るゝの間隙もない。故に至心に信念する時は近縁を爲すといふ。

(2) 如來を愛して念佛する故に親縁となる

信仰が感情に入るを愛樂といふ。彌陀を信じて最も親密になり、感情上相融合し相吸引して離れざるものは愛である。如來無上の慈を以て衆生を愛し給ふが故に、其愛に首まれし我らまた彌陀を愛慕せざるを得ぬ。

温かなる血の糸を以て彼と我とを繋ぎ合ふて離るゝことのできぬものは愛である。彌陀と念佛衆生の間に於て此親密なる因縁は結ばれてをる。されば導師の衆生佛を憶念すれば佛もまた衆生を憶念したまふ、彼と此との相捨離せぬを親縁と名くと。我ら常に彌陀を念じて止まざる時は此血も肉もすべては彌陀の慈愛に融化されてくる。故に忘れんと欲するも忘る能はず離れんと欲するも離るゝことができぬ。それは深く彌陀を愛するからである。故に彌陀と念佛者とは永遠に切つても切れぬ愛の糸を以て

一三

永遠にまで繋ぎ合ふてをる故に親縁と云ふ。

(3) 欲生の障礙を除く増上の力

意志の信仰として、彌陀の世嗣と成り度い、また佛國に生れ度い、又佛に成り欲いまたは聖き人格と成り欲い、光明の生活に入り度いと云ふ欲望が發らざるを得ぬ。已に感情に於いて總べてに超えて、彌陀を愛す。然して愛の結果は彌陀と共に永遠にまで同様せず止まぬ欲望が生ず。されど凡夫と佛との中間に非常な障礙物が横は

つて兩方の間を隔離させてをる。开は何なる魔物凡てまた何處に伏在するの間は、答へて云はん、开は實は外に存在する物でなく、凡夫の胸中に伏して居る諸の煩惱と及び諸邪業繋である。然し夫らはいかに深重なる闇黒の力を以て我ら凡夫を惱ますにせよ、彌陀威神の光明には敵するものでない。光明の生活に入り度いと欲望が深くして一心に念佛する時は、彌陀の光明が増上縁と爲つて、諸邪業繋の間は必らず薄らぎて、竟には光明界の人となり得らる。我らは彌陀の強き力に助けられて、光明中に不斷に精進不斷の改革念々に佛道を増進し漸々に完全な人格に向上することを爲る。

斯様に至心に深く如來を信じて念佛する時は、信心開發して、佛智光明中の我なることを信認するが故に近縁と爲る。又一心念佛して信心澄淨となるが故に佛日常に映現す、故に近縁と爲る。至心に如來を愛樂して念佛すれば彼と此と相離れず、最も親密なる因縁と爲る故に親縁とす。至心に彌陀と共に在る人と爲らんと欲するも、諸の煩惱と邪業の爲に妨げられて佛と常に隔つ。然るに一心念佛する時は彼の佛の光明の増上縁に依て、障礙物が消滅して光明中の人と爲ることをう。

七 餘の行人を照さざる所以

法語に「餘ノ一切ノ行人ヲバ、照サズト云也」

一五

彌陀の光明は餘の行人を照さざる所以はいかにとなれば、彌陀は選擇を以て本願を立つ。彌陀は慈悲を本として正義をも無視せぬ。選擇本願は是正義である、有ゆる國士の鹿を捨て妙を取り、人天の惡を捨て善を取るは是正義である。凭る眞善微妙の精選したる佛國の中に生れんとせば、彌陀の聖意に契はなくてはならぬ。彌陀は甚變の人を撰みて攝取し給ふやと云はゞ、至心信樂して念佛する人を撰び取りて捨てぬ。餘の行人は悉く捨て取らぬ。彌陀の光明は自己の子等を攝取して、心靈を養ひ眞の佛子と爲し全き人格と爲すを目的とす。

故に聖意に契はざる者は用捨なく撰みて之を捨て給ふ。其故は若し稻稗を共に合して之を養成せば、必ず後の憂ひとならん。餘の行人は已に彌陀の子に非ず、佛果を成すべき種子にあらず。餘の雜行人は雜草の如し。若し之に光攝を與へて其等を繁殖せしめば、有害無益となる故に正義の本願は撰みて之を捨て給ふのである。

彌陀の光明と念佛衆生とは、内的本質に於て同性吸引の勢力として、自然に念佛衆生は光攝の利益を被むることを得。餘行は本質に於て已に異なるが故に、光明を被むることはできぬ。凭の如きの因縁を以て餘行は光攝を被むることの資格はない。

八 欣淨の爲にも餘は照さざる所以

「但シ餘ノ行ヲシテモ極樂ヲネガハバ佛光照シテ攝取シ給フベシ、イカバ。」
 此間に答ふるに、善導和尚の唯有念佛蒙光攝の文を引いて、餘行の人は光攝を蒙むること能はざることを證す。

此文の意には、彌陀の本願と念佛衆生との間に宗教の眞實生命の存することを示せり。其故は、極樂を欣ぶ人ならば餘行にても念佛にても、歸着する處同一なれば彌陀同じく光攝し給ふや否やとの問である。宗祖の思召には夫は然らずである。所以は何となれば唯念佛者のみ光攝を被ると云にぞ、最とも甚深の意義が存す。其故は、彌陀の本願の目的は眞の佛子を育て完全なる人とならしむるにあり。唯極樂の受樂を聞て樂を貪ぼる爲に生を求むる輩の如きは、光攝を蒙むる理あることがない。彌陀の聖意

は若し法華の文を借りて云はゞ、一切衆生をして佛知見を開示し佛の正道に悟入せしむるに在り。智慧門と慈悲門と異なるれど、彌陀の光明は靈的人格を養成し自己の全き如くに衆生を全からしむるを目的とす。故に念佛衆生は安心に於て佛種子なるが故に大慈光明の養分を蒙むることが得らる。餘行は佛種子の核が具はつてをらぬ故、養成の力を被るも其功果有ることない。

九 彌陀靈的人格現

眞の生命ある宗教と、聖道門即ち哲學との異なる所は、先づ第一に、靈的人格の本尊を確定すると否とにある。我が淨土教は眞の宗教なるが故に、絶対的に尊崇すべき靈的人格の彌陀を本尊とす。念佛行人は斯の靈的人格を本尊として自己の生命を獻げて歸命し信賴し愛慕して永遠の攝受を仰ぐ。文に彌陀身色如金山、相好光明照十方、唯有念佛蒙光攝、當知本願最爲強、彌陀は神聖無上の威神が、如金山の身色と現はれ無上の慈悲が最も麗はしき相好と見え、大靈力の光明は遍ねく十方を照し給ひ、念佛の衆生を攝取して、聖意に應うべき様に靈化し給ふ。宗教は衆生をして人格的に靈活せしむるにあり。故に彌陀は、衆生を愛する大慈悲が相好に表はれ、萬徳圓滿なる人格と現はれ、如來の人格現は其の光明に接觸する念佛者の人格的に靈化する爲である。彌陀の威神極りなく儼臨し給ふことは、衆生の人格を神聖ならしめんが爲にて、慈悲の相好は我等が内容を変化せん爲である。唯念佛のみ光攝を蒙むることを次に述べん。

十 光明念佛者を攝取して捨てる所以

佛光が念佛の行者を攝取して捨離せざる理由が、三義ある。一、信心喚起せんが爲に、二、信心開發せんが爲に。三、光明の生活々動させんが爲に、と斯三の理由が有て光明に撮めて慈悲の御手から放し給はぬ。

一、信心喚起せんが爲に離さぬ。

彌陀は大悲の父である。親の手を離れて子は成長し得ぬ。太陽の光熱化に由らざれ

ば、地上の生物が生存できぬやうに、彌陀の光明に依らざれば、衆生の心霊は喚起することとはならぬ。親が子を養育するに、初めは胎内にて養ひ、生れて哺乳にて育て、亦家庭にて教養する。總て親の手を離れて成人するものでない。心靈生活の理に於ても矢張り同一である。如來の心光を離れて信仰過程は成就せぬ。

初めに信心喚起の爲に捨てぬとは、衆生の佛性は佛の卵子である。如來大悲の懷に在りて温熱を受けざれば佛性が解化せぬ。其熱を受くるのが常に彌陀を憶念す、即ち口に稱名し意に佛を念じ、如來の慈悲と衆生の信念との合致する處に熱誠なる信念が喚起せらる。

然れ共信仰の喚起は容易でない。また妊婦が妊娠中に於けるよりは中々に容易ではない。未だ信心獲得せぬうちに、温熱が冷却すると流産の憂がある。己が業障の深重なるを感ずれば、彌陀の加護を仰ぐこと彌々甚深、三昧熱誠の最頂點を煖法頂法位といふ。信念内に動き大悲の増上縁が加はり、啾啄同時に三昧融合して佛性が解化し、信念の新たしき生命が復活し、卵殻開裂して雛子の如き清らけき聲を揚げて、喚起の兆候を現はす。是信心喚起の位にて、無憂樹の花咲き匂ふ卯月八日の曉、歡喜の日である。若し彌陀大慈父の攝護の下にあらざれば斯に至ることはならぬ故に、喚起させる爲に光明に攝めて捨てぬ。

二、信仰開發させん爲に攝めて捨てぬ。

八日の曉に歡びの聲をたへて出産を祝ひし上には慈母の能事たりと云ふことでない。此よりは益々母の攝護を要す。哺乳は申す迄もなく總べて母の手によりて養育せらる。されば彌陀の慈光は彌々仰がざるを得ぬ。

信心開發の爲に攝めて捨てぬとは、先の喚起の位は、喩へば植物の種子から萌發したやうな物にて、夫から成木の後に花が開く如くに心靈の開發を期す。既に一點の光に照されて従前の我を返照する時は、自己の罪惡の深重なるを自覺し、願くは彌陀の光明に清められ、聖意を我意とし公然合一せん。また大悲の懷に融合し平和なる生

活に入らんとの渴望は、益如來の大悲に縋り、念佛三昧を以て父子合一せんとの信念彌々切なるを覺ゆ。三昧融合神秘不可思議を感じて心靈の開發となる。是宗祖の、「あみだ佛と申すばかりを一つとめて淨土の莊嚴みるぞうれしき」と詠じ給ひしは此消息を洩し給ふたのである。若し夫れ如來の光明が、念佛心を攝取して靈力を與ふるに非ざるよりは、争でか凭の如きの妙境を感ずべけん。故に開發させんが爲に攝取して離さぬとは云ふ。

三、光明の生活々動させん爲に離さぬ。

既に信心開發の後には即ち信後の生活である。卵殻を出でて光明無限の新天地に逍遙するの想あり。絶對無限なる大悲の懷は十方を袤みて遺すことなく、一切の處一切の時に永しへに攝取せらるの靈感あり。念佛者の生命は已に佛子佛心、親を離れたる子なく、慈悲の力によりて生存す、全人格を擧げて彌陀の有である。全我如來の有なるが故に、如來は亦我有である。此に於て父子合一し如來は全く我父我母は如來の子なので、靈き人格と成りて生活々動す。我らが此肉體が太陽の力にて生存する如く、我靈は如來の心光を被りて聖き生活が得らる。如來は我等に聖き生命と善き働きの原動力を與へたまふが爲に、聖意に攝めて捨て給はぬ。法語の「念佛は是れ彌陀の本願の行なるが故に、成佛の光明、還りて本地の誓願を照し給ふなり」とは本願の行は御親の靈育を被りて、佛子佛心佛行を爲すやうになること、故に念佛に非れば御親の心と相應せざるが故に御育を被むる能はぬ。餘行は彌陀の子を養ふべき養分でない。故に佛の光明は佛子を靈育して親の聖意に應ふ人とし、父の全き如くに成佛せしめんとの目的に外ならぬ。されば目的に應はざるものは悉く撰みて捨つると云ふことになる。

十一、極樂に入るの資格を造るため

「極樂ヲ求メン人ハ、本願ノ念佛ヲ行ジテ、攝取ノ光ニ照ザレント思召スベシ」
極樂を求めん人は先第一に彼光明土に入るの資格を造ることを要す。自己の精神に

其資格を備へず、唯彼土の受樂無間なるを聞いて樂を貪求する爲に往生を欣ぶも何の功か有らん。念佛は彼の光明土に入る資格を造る爲の妙業である。彌陀の願意實に此に在す。念佛を稱ふる旨意は如來の光明に攝化せらるゝ爲なので、光明に攝化せらるゝ時は、從來の闇黒の我は今は淨化して光明の我と爲り、人の子が佛の子と轉化し、先に申した信心の喚起と開發と活動とは皆な淨土に生るゝ資格を造るの階級に外ならぬ。

其淨土の合格者とは何を以て知ることが得らる。喩へば、柿や橋子の果實が能く成熟する時は外皮も美しく、其味も甘く、其種の性分が充分に發揮する。既に其時は核も熟して種子の性分が成熟してをる。故に之を播く時は必ず生産起元の作用を有してをる。實に宗祖の圓熟し給へる人格は形を見れば法然房實は阿彌陀如來と、是彌陀の光明に靈化せられたる模範である。是攝取の光に照されて信心成就のすがたである是れ極樂に入る資格が具備したる者である。念佛の行人須らく芳躅に順ふべきである。

十二 唯念佛の一行を以て勸結す

「コレニツケテモ、念佛大切ニ候、ヨク／＼申サセ玉フベシ。」
 吾祖の專修一行主義は最初の手ほどきから成佛の終に迄終始一貫して念佛三昧である。されば宗祖は三心四修五念門も結歸する處は南無阿彌陀佛と示し給ふ。此念佛の一行にて仕揚げた模範が即ち宗祖の靈的人格である。實に念佛大切に候。徹底した念佛を以て、宗祖の靈格を倣ひて、自己の人格を造り揚げることに大事にて候。念佛三昧は三世諸佛も悉く此行に依て正覺を成じ給へり。五劫に思惟し兆載永劫に結びたる果實の念佛、此佛種子を以て遍ねく一切の衆生に播し、今生より盡未來際にまで共に無量光の正覺を成じ、同じく無量壽の涅槃を得んことを期す。願はくば諸の衆生と共に安樂國に生せんことを。

名號佛種子

名は體を徴す。若し如實に名體不離の眞理を體得すれば、名號は萬德總括する彌陀の種子。種子に本有と新薰とあり。本有の種子は衆生の佛性、衆生法爾として具足す新薰名言種子、業種子、八識中に伏在して自體果を生ずる能力あり。色心萬法を現象する生産の起元作用なるが、喩へば植物の種子に生産作用ある如く、生物の元形質が種子の細胞に入りて種子となり、一切の枝葉根莖等が籓込式に伏在して、縁を待て漸次に發展顯現す。

一切佛教中、名體不離の名號は佛種子にして、一切の佛法は悉く佛陀の心靈より咲出したる花である。妙法の蓮華も大方廣雜華の花も乃至一切經は悉く是如來大悟の菩提樹の枝葉と花とに外ならぬ。只體を徴する名號のみ佛種である。宗祖が佛種子の名號に存することを悟り、一切佛教の枝葉と花とを捨て、衆生の爲に佛種子の名號を撰みて、之が薰發して、播下して養ふ時は菩提樹と爲て一切の佛教の枝葉花果悉く生ぜしむ。

至誠心

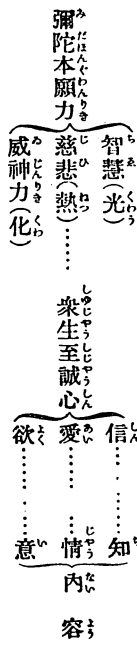
往生は世にやすけれど皆人の

誠の心なくてこそせぬ

至誠と虚假

心の二面

至誠(開發)佛性—道心—靈性—聖靈性—正善源
 虚假(靈化)煩惱—人心—肉性—動物性—罪惡源



(おはり)

又三性分別して靈性を顯示す。

天性—動物共通性—生理機能性—本能的—意識的虚偽なし

理性—人の特殊性—自己の動物性を制止すること能はざるも—虚偽をなす

靈性—如來共通性

易—靈我—本能に伏藏する真心本如來藏心を根元とするが故如來心の淨

土に歸入すること易し

難—肉我—虚我は本如來心と背致するが故に肉の煩惱に順するが故に淨

土に入り難し

眞實心の本體は生佛一如の眞如、即、眞實心、衆生本佛性伏能とす。人性のみ

開發して未だ靈性開けざる時は虚偽心、衆生の心源本本覺佛心を根底とす。然るに人

間の理性が動物性に順ふが故に虚偽となる。佛心に順ふ故に眞實心となる。

眞實心は本然の自性、一たび迷ふて他郷に出づ。故に本性に順ふ時は法爾法然とし

て往生す。

内容(向位)—信、愛、欲

信—一、仰信。二、解信。三、證信。

至心愛樂—一、母子的。二、同棧的。三、大小二我合一的。

欲生—一、願作佛(往想)。二、父子合意。三、願度生(還想)。

愛樂

我はたゞ佛にいつかあふひ草

心のつまにかけぬ日ぞなき

信と愛

宗教中心眞體は冷靜思索の知力によりは溫暖熱なる感情にあり。假令如來の實社を

理論的に信認すと雖も、如來を全く我が有として感情的に愛慕憶念して常恒に心の妻に繋りて捨離すること能はざるにあらざれば生命ある信仰と云ふべからず。

キリストが神の人に對して無條件の愛、キリストが父子の親愛に神人關係を求む。愛するものよ、我等互に相愛すべし。愛は神より出づるなり。愛なきものは神を知ら

ず。神は愛なればなり。其れ神は其生み給へる獨り子を賜ふほどに世の人を愛し給ふこは凡て彼を信する者に亡ぶることなくして、永生を受けしめんがためなり。と

愛の中に恐あることなし。至き愛は懼を除く。保羅は假令天使の言を語るとも若愛なくば鳴る銅や響く鉄の如。山を移す程の諸

の信仰ありと雖も、若し愛なくば數ふるに足らぬものなり。信仰と望と愛とこの三者の中最も大なるものは愛なりと。

愛は兩者の情の糸をもて兩者を繋維す

相互に愛し合ふ兩者の間には心情の強き維を以て繋ぎ合ふ。若し愛に愛子を有てる母あり。小兒痛く病みて疼痛甚し。母は其子の苦に對して云何に感せん。子と母とは己に其體別々なれば子の疼も母が子に對する同情なからんか、母子其體を異にする

も相憐の情に於ては忍びざるの情あり。若人眞實に如來を愛する時は己よりも還つて如來を愛す。凡てに超えて如來を愛するに至るべし。梵網經に、惡人邪見人ありて、佛法の非法非律なりと誘る者在るを聞

て、三百の鉢を以て其胸を刺さる、如くに感せざるものは、眞の佛徒にあらずと。實に然り。若人深く如來を信愛する時は誘らる、聲を聞く時は實に忍びざるの感なかるべからず。導師曰く、衆生佛を憶念すれば佛も還た衆生を憶念し給ふ、彼此の三業相

捨離せず、故に親縁と名づく。愛は宗教中心眞體

如來は大慈悲である。故に信しても深く彼を愛樂するに非ざれば如實に如來を認む

ることではできぬ。愛情を以て最高最大の慈愛者に融合する時は、甚深の聖交を以て如来の中に理想も進み永遠の生命も現はれ来る。

眞の如来を愛する美の生命も、肉の生命が母の胎内から産出した時は、目も視へず耳も音聲を聴きわくこともできぬが、母の哺乳に育てられて、目も見へ耳も聴わけて出来るやうに爲る。而して母と子との暖温なる愛情とでも、産出ると直に双方に深い愛が沸いて居たのでなく、常に掬養せられてをる間に、段々愛てふ暖温な情緒が兩者の間に繋り合ふことゝ爲る。靈的愛も同じく常恒不斷に如来を讃た、へ清き祈を献ぐる、又如來の福音に依りて信念を養はるゝが靈の哺乳となり、宇宙に如来ほど大なる愛、無上の美、一切の萬徳、圓かに備はりて常に衆生の子を愛念し給へり。我等が無上の愛無限の美に憧がれて天の一方に憧がる、最高者に融合せんと望みは益自己の靈性を向上せしむる動機である。

我等は赤子である。如来の大なる慈愛に懷擁されて居るけれども、未だ孩兒で、慈愛の母の面を見ることができぬ。我は唯佛に早晚か逢草芙蓉、常に如来を葵瞻して忘るゝことが出来ぬ。此靈の戀愛こそ靈の自己を自己の中心から自己を如来大ならんと原動力である。如来を葵瞻する。如来は眞である、美である、最高者に觸れんと欲するに吾等は益々高く懼れ、猶太の豫言者が「汝が心を傾け汝の魂を盡し又汝の力を盡して汝の主なる神を愛すべし」とは宗祖の如来に於ける靈の愛である。

如来に靈養せられて自己の靈が彌増に隨て如来を愛するの情も益増長する。愛は自己の中心から衝動する真情である。他人から汝如来を愛して常に忘れざれと命令されて動く力でない。

理想の淺劣なる者は其愛する對象も隨て淺劣者である。靈に活くる者は大靈の如来を愛して止まず。

如来は永遠の生命である。如来を葵瞻して靈戀の情止み難きも此世に死して而して後に如来を觀上る者と思ふことなかれ。如来は永遠に活ける者、活くる者に仙遇せん

と瞻仰して死して後何にして遇ふことを得ん。汝が靈は未だ永遠の生命肉の殼の中に在り、芽ざしかつたのである、頓て益繁茂して愛の蕾をもつて而して美の靈花が開くのである。其馥郁たる芳と麗しき色とは如来の慈愛の潤ひに灑がれて開く花である。

母と子との關係の愛

宗祖の本地と崇むる處の勢至、楞嚴の勢至圓通章に爾時大勢至法王子、與其同倫五十二菩薩、即從座起、頂禮佛足、而白佛言、我憶往昔恒河沙劫、有佛出、世名無量光、十二如来相繼出現、其最後佛名超日月光、彼佛教我念佛三昧、譬如有人、一專爲憶、一人專忘、如是二人、若逢不逢、或見非見、二人相憶、二憶念深、從生至生、同於形影不離乖異、十方如来憐念衆生、如母憶子、若子逃避雖憶何爲、子若憶母、如母憶子、母子歷生不相違、若衆生心憶念佛、現前當來、必定見佛、去佛不遠、不假餘方便、自心得開、如染香人、身有香氣、此則名曰香光莊嚴、

我本因地、以念佛心、入無生忍、今於三界、攝念佛人、歸於淨土。

佛問圓通、我無撰擇、都攝六根、淨會相續、得三摩地、斯爲第一、

愛の中心——異性を愛するに例す

かりそめの色のゆかりの戀にだに

あふには身をも惜しみやはする

宗教の生命は感情にあり

感情の信仰發達の順序

人間は感情には何か自己の無力なるを感じ、自己己上の偉大なる力ある靈格に信頼する感情、又自己の靈未だ嬰兒の如く、母の哺乳に預らざれば増長できぬ故に、階級の初は嬰兒の母に於る如く、漸次に進みてミオヤと親子的の感情に信頼す。人類が青年期に至れば親の手を離れて配偶者を求むる如く、心靈も亦然り。愛の信仰に於て只

自分を養育被むる恵に對しての恩愛の情よりかは、もつと力のある同棲者を求むるの愛情的に發達して愛情の姿色が變現す。

欲見佛戀愛

青春期に自己の理想に適する異性を戀念する如くに如來を愛慕す。こゝに於て愛の信仰の對象たる客體は最圓滿なる美の表現である。

如來の表現。如來妙色身、世間無與等、又如來八萬の相好圓滿は最美の大愛の表現である。衆生を愛する、衆生を誘引する現はれ。

生物進化の雌雄淘汰の作用は益美化す、進化する。孔雀の尾の如く驚の美聲に於ける如く宗教心も益々主體の信が進むに隨つて客體の靈相も彌微妙に觀しらる。起信論に報身の相好微妙なるは菩薩業識の所感にて、菩薩の意識が増進するに隨つて所現の身相も益勝妙なるを感ずと。能念所念と共に進むは是衆生の心情を向上せしむるの方便なり。

若し衆生の靈性美を發展せしむる手段として如來相好圓滿の美的靈象を示す。

肉に約する戀愛は肉の生命發展するの自然則にて、戀愛は肉の生命を美に向上せしむ手段たる如く、靈界の如來微妙の色相は衆生靈性の美を發達せしむる方便である。肉は愛する者に己を獻ぐることを悦ぶ。靈は靈愛する者に己を犠牲にすることを悦ぶ。

戀愛の爲には身命を惜まず。況や永遠の生命なる靈の戀愛何ぞ生命を惜むべきぞ。

プラトリーの戀

哲人プラトリー、天の一方に憬がれて冥想に耽りて恍惚として得も云はれぬ靈微妙を感じたるを、對象を宗教的のやうに具體的に慈愛に富める人格者に置かずして、只何處となしに憬れて靈感を覺へて居つた。若し彼にして宗教的に、喻へば善導大師の般舟經に於ける如く、如來眞金色にして圓光徹照して端正無比なるを想ふと云ふ如き法に遇ふことを得ば、彼は偉大なる宗教家に爲りしや疑なし。

宗教詩の天才ダンテは、幼少の時からビクトリヤ嬢を見て非常に戀愛して終身離れざりき。彼が宗教に入りて冥想に耽り靈界に精神を逍遙する時に、曾て肉體戀たる嬢が、後に冥想の精神界には女神マリヤの如くに表現されて、天國巡りの案内されたと云ふ。彼がビクトリヤより引發されたる戀愛から、後に靈界に精神を入るるの種子なかりせば凭る傑作は現れぬかと思はる。

孔子も賢を賢として色に易へよと。意は、世のなべての青年は色を好み若し之に遇はざれば己を忘れて思を焦すに非ずや。若しさばかりに賢人の戀を慕ふて道を求めたことならば、己も又賢人と爲るべきものとの意ならん。宗教は靈の對象なる美人大靈の靈應を戀ひ慕ひて靈の生命に入るるのである。

靈的同棲

使人欣慕法門、且似淺近、自然悟道密意、極是深奧」と
如來が無量劫に相好莊嚴の徳を積みて最美の表現となりしは、要する處衆生を引つけて相愛同化せんとする願望である。人の感情は自己の愛を獻ぐる對象の爲には自己を犠牲とすることを悦ぶ。故に最愛者に己を獻げて夫に對しては自己を空にする故に自然とそれに同化せらる。

又絶對的に愛する者あれば其對象を生命を賂しても我有に爲んことを望んで止まぬ肉に於ても然らん、我有に爲さんと欲すると共に我亦彼が有と爲らんことを望む。云々換ふれば我彼を愛して我を彼に獻ぐるが故に彼も亦我を愛して我に獻げて呉ればよいと。宗教の靈愛にも例相同じく、唯一に愛慕し上る如來の靈應を我有とし、一心に佛を見んと欲して身命を惜まず。然れども中々に靈應微妙の象は確乎として知見して我有と爲ることは難い、實は難ければ難きだけ靈に對する戀慕の情は昂進す。之を我有とすること能はざれば彌々煩悶に耐へぬ。

伊勢が、みじかきあしのふしの間も歎きし如く、靈の戀念にも亦然り。微妙の靈相は存か若は亡が如く、中々に捕獲し難く、悶へ惱みて逆も得難からんしとて斷念す

ることは出来ぬ。得ること能はざれば遑つて執意は彌益増す。此だに叶はぬことなれば世に生存する甲斐もなきと迄にも感情は昂進する。

一休和尚の諷も此一端を示す。

終に三昧發得する時は最愛者と我とは常恒に離れぬ。されば二祖は念佛三昧とは値遇佛不離佛と釋し、此意が全く現實と爲り來るが發得又三昧成就と云ふ。肉に例せば愛する偶者を我有として同様することを得たのである。

愛の意義

肉に於ても靈に於ても愛は生命である。尙人生に何物か自己の愛する對象を認めて此を得んと望み、已に得たれば此に愛を注ぎて其愛する對象に己が心情を交換し(一)をかはし、其相憶相愛の間に、暖温な生命と最麗しき生が働きて人生を潤澤して居る。若人愛の對象毫も無かりせば、唯呼吸は爲し居ても囊の氣の出入と同じく、生に暖みも潤も色も香も存せぬのである。

然るに人格の高下に愛の對象に高低がある。唯肉の好色や又は金や貨財や名譽など計りを愛欲の對象として之を生命と爲して居るものは畜生や餓鬼の性格である。靈の最靈なる神を對象とし愛の生命と爲して居る人は最高尙の生命である。

最愛なる者に献げし生命

予は凭く信じ凭く愛す。故に宗祖も亦凭くいませしことと思ふ。

人生の價値は那邊に存す。自己の最愛なる者と生命を共に爲る處に存す。人の幸福の感じは那邊に存するや。矢張自己の最愛なる者と共に生存し、心情を交換し、相語り相擁抱し相抱合ひ現在より永遠に迄生命を共にすることを得るに在り。

世間に肉體相愛の中に彼と俱ならば假令水火の中を服ばじと、又彼と離隔するならば寧ろ死するに如かじと。此亦心靈にもかゝる心情の深甚なる感情存す。眞實に如來を愛し我生命とし愛するあらば、最愛なる如來と俱に在るに至らず苦も忽ちに變ぜすべし。

最愛なる物と俱に在らば如何なる處も無上の樂處と感すべし。

最愛なる如來と共に在る我なることを感するときは、何の處に於てか極樂ならざらん。若し人眞に如來を愛するの眞情なく、唯極樂の快樂無比なるを聞て往生を願ふ如きは眞の幸福を感する能はず。若し眞實に如來を愛慕するの眞體より出づるならば、如來と共にある處一切の處として眞の幸福ならざるなし。

又如來は精神的に一切の眞美微妙一切の樂として悉く如來の靈德に具備せざるなし。故に如來と共に在る時眞の幸福を感せん。

欲生

自我實現せんと欲す。自己の性を遂げ、伏能を開發し、自己のあらん限りを盡さんと欲する欲望。

行爲に實現す。心靈は自身の中に自由を求むる。自由の理法に依つて自己を自由にせんとして居る。夫を實現するの行爲である。己が力を竭して働くので、自己が益々顯明となる。自己を發達すればする程、自己の全體が顯はれて來る。視よ梅の種子が芽を出し、蕾から花となるのは、種子の中に任麼な物が伏在して居るか、外からは不明であるが、その己が力を竭して働き出すから、芽を吹き、また蕾は花を現はすのである如く、人の靈的生命も動物的本能の性の中にあつては、佛性の種子も一向價値が認められぬ。即ち狗子佛性と何の別もない。之を實現してこそ、自己の眞價が判明となつて來る。如何に聖人として聖人の靈德を顯はすには、己を竭し全力を盡してこ

そ、始めて聖徳が顯はるゝ、何の處にか天然の釋迦自然の彌勒あらん。

靈性が働き實現せざれば何の能かある。

欲生として自己の靈的生命が不斷に活動して進めば進む程、新しい世界が發現するのである。種子が芽を出すと、幹から枝が、枝から葉が、枝に條が發展し、次第に成長すれば新しい枝條も葉もまた花にまた果を結びて、また新しい我生命を幾らとなく分身して忙しい如くに、吾人の靈的生命も大靈なる大地の上に、根底を有つて居る無限の養を受けて、而して自己の靈徳の枝葉が大悟の花や愛の花を咲かせ、汚穢の物でも之を肥料とすれば、彼も之を營養として、而して自他力を以て新緑の蒼々たる色とも紅葉の麗しき華とも變化させる。あの麗はしき花が汚れたる塵の後身とは惟まるゝけれども而も事實である。我らの煩惱として貪戻私慾の汚情肉慾もまた我慾も靈生命の肥料として供する時は、悉く靈的生命を莊嚴する美德として現はるゝのである。

我は佛子であるから、靈の美性を自由に外部に實現せなければ自由が出来ぬ。世の腐敗極まる社會にあつても、自己が律法と秩序とを立て、世の惑害を退けつゝ自由に善を行へば靈の性は現はれて眞善となる。自己の性を外部に實現せねば、靈は内部で自由を見出す事が可能ぬ。人の心は常恒に活動して居る故に不斷活動は自己の力善と美と靈を活動し行爲に現はるゝに非ざれば、全人格を發揮することは出来ぬ。欲生の靈に生んと欲するは靈の活動を意味す。

其靈欲が大なれば大なる程、自己の大なるを自覺する。自覺すればする程行爲に現はさすに居られぬ。

然れどもそれは靈が如來を愛し、其無限の泉源より自己の心に湧き出る甘露の味を嘗めて不死の生命に入つた人にして始めて眞の生命ある行爲が出来るのである。

常に靈に活きる人は、肉に就いての人々の悲痛や束縛から既に解脱して居るから、敢て意に介する事はない。

視よ橋子の實は確と枝に執意して、雨が降らうと風が吹かふと構はず一生懸命に自己を完全に熱せんが爲には、全力を注ぎて養分を吸収して決して放れまいとしてゐる。彼等は生んとする力が強いから、熱して新生命を造るのである。

我は佛について居る果である。我靈は大なる靈を離るゝことの出来ぬ運命を有つて居る故に、自己の佛とならんと自己を完成せんが爲には、自己の生活と行動とは眞善の努力を以て自我を實現せねばならぬ。是また生の欲である。靈に活きんの欲である。つまり靈我を愛するからである。眞の欲望を満足せんが爲である。永遠の生命に活きんが爲である。永生の爲には苦痛も悲傷も感じない。否却て肉の苦痛や重荷は靈を治すの肥料に過ぎぬ。

靈の火が熾んに自己に燃えつゝある時は、煩惱の薪も還つて火力を増進させる材料となるから、敢へて苦にならぬ。唯大靈の源と自己の靈との間に大なる力のみありて靈の火は自己に燃えつゝあり。

人生は光明の大道に、光の行爲である。眞善微妙を益々發揮し實現せんとの活動である。眞善微妙は肉眼の範圍に求むべきでない。

自己の靈性が如來の光明中に益々發揮するに隨がつて心靈界に經驗し得らるゝ靈國である。

人生は神國即ち涅槃界に到達する過程である。然れども誤解すること勿れ。眞善微妙の靈界は十萬億士の彼岸にあつて、佛の神通力でふ飛行機に乗つて彈指の頃に達する處と。外界の空間的の彼處に常樂の國ありと云ふにあらず。凡夫の常識即ち心は無明に覆はれて、私慾に依つて本來常樂我淨の如來の絶對なる涅槃光明界中にありながら、自ら煩惱の爲に經驗することが出来ぬのである。若し如來の恩寵心光に養はれて、自己の靈性が活動顯現するに隨つて、靈性が發揮すれば去此不遠、此の土に在りて如來と共に永生常樂を受ける事が出来る。

喩へば豪富なる長者に生れて、まだ旬日を経ぬ小兒あり。いかに美を極めたる室に

ありても自ら見聞することは出来ぬ。然れども母の哺乳により小兒成長して、身と共に眼や耳も發達して見れば、本また見ることの出来ぬ時の室でありながら、自ら見ることを得れば、此處が本美を極めたる宮室である。吾人も亦然りである。欲生我國とて佛國に生れ往くといふも、決して此に死して彼に生るゝに非ず。自己の靈性が生れて顯現して見れば、此土が即ち淨佛國土にて如來と共にあるのである。それには自己の靈性を完成せねばならぬ。自我實現せざるべからず。人格圓滿に成熟せる時は、此土も淨佛國土である。

小兒が一日一日たつに随つて、つひに目も見えて来る。吾人も自己の全力を竭して如來より得る力と一歩々々進んで、如來の愛に注がれて、自分から靈的衝動と共に、内外一の微妙なる調和の世界に現じ来る。

淨土を現はし、淨國の人とならんと欲せば、如來より受けたる生命を發揮する様に行為すべし。現世界と現人生とは、淨國を實現せんか爲の生である。現生を捨て他世に於て、成佛國土の修行せんといふこと勿れ。經に、此世界に於て一日一夜精進力行すれば、彼の淨土に於て百歳するよりは勝れたりと。そは現に活動世界を離れて、無限涅槃の實現を計ることの非なるを誠しめられたのである。

現世は如來の中に如來無限の靈界を實現せん爲の生とすれば、之を實現せんが爲には、いかなる行為も喜んで努力せざるべからず。如來と共に無限の淨國に生活せんの欲望から働く時、いかなる艱難困苦も選つて樂感と化する。いかにとなれば、其艱難困苦は自己を精練して、鐵を鍛練して名劍を鍛化する目的なればなり。我らが靈性は煩惱の礦垢を陶冶せざれば、眞善微妙の靈性が發現せられない。然れば窮乏に逼らるゝのも、選つて自由の靈徳を現はす爲の手段である。

人生を充實す

人は如來から分受した靈の生命を完成し、また圓滿にし、生を充實せしめんが爲の

生活であるとするれば、吾人はいかなる仕事活動が自我を充實するので、いかなる仕事に虚妄となるのであるか。至誠心から眞理に叶ふ仕事は自己を完成し、また生活を充實せしむる。眞理は光明で不眞偽妄は闇黒である。闇黒なる迷妄から働く業は根底に於て誤つてゐる。私慾我まゝからなすのだから、自己の靈性を完成する業とはならぬ。また永遠の生命を充實する行為とは云はれぬ。人は靈的光明の中に、身口意に於て常恒不斷に活動すべきである。人類は鳥獸のやうに、本能的に働く計りでない。より以上の事業、よい事をなさなければならぬやうに出来てゐる。人類の仕事は他の動物とは異つて責任が重い。権理が強いほど責任が重い。種々の義務とか責任とか仲々重い文明に進めば進む程責任が重くなる。働きが繁くなる。努力して土地を多く所有すれば所有する程、租税等の義務が重くなる如く、人は進めば進む程義務も責任も重くなる。

經に、「菩薩は不請の友となりて群生を重擔として度脱す」と。

人間は社會を重擔として負はなければならぬやう使命を有つて居る。恰も大造化が常恒に建設事業を一切の處に於て行つて居るやうに、人間は建設しまた破壊し、物を積んだり散したり、法律を作つたりまた棄てたり、種々の業を爲して常に造化の樓閣をして居る。矢張り大ミオヤの子であるから親の爲す業を休むことがない。而して圓滿なる親の子として親の完全なる如く、完全ならんとして、不斷に自己を改革し改造し、活動し全く現在の我は不完全であるから、完全に進みたいと欲する處に、また自己の理想を身に實現されて居らねば、願くばこの望を達し度いと云ふ處に、佛子の志想があるのである。

人生は生涯を盡してまた階級にして完成に進まんとする行程に過ぎぬと自覺し、益々自己の活動範圍を擴張せんと欲して止まざる處に實は前途有望なので、若し自ら偉大充分だといふ高慢と、また自分はもう駄目だ向上の望はないと云ふ弊と、懈怠とに陥入つてしまへば既に靈に死んだのである。今尙未成品にて益々進んで完成せんと

欲望こそは、向上を完成せしむる力である。

欲望に願作佛心と願度生心との二

願作佛心とは自己の靈性を發揮し自我人格を圓滿に完成せんと欲するに、甲は内自己のすべての弱點を排除し、諸の肉的我即ち私欲我なる幼妄を除きて靈我を實現し靈我を完成せんとするには、自己を如來大靈の中に投じて私心を滅ぼし、靈我が顯れ靈我の力を發揮するには全力を竭して活動し、萬善萬行を以て自己を充實せしむ。

一方は自己を完成し、他方には充實したる自己を實現する爲に働く。絶對なる如來の全體と合一し、一切を自己に容れて充實せしむ。乙は自己に得たる如來の聖力によりてうけたる力を實現することに努力。一方は精髓にて一面は體現である。内面が充實しないで働くのは妄働である。只我愆から行爲するのは靈の生命のない働きである。終には我愆の奴隸となつてしまふ。また一面に只内觀冥想に耽つて、つひには靈力が麻痺してしまふ。眞に靈に充ちたる時は、内外相互相依つて内容の力を一切の物にも及ぼし、内威の歡喜から溢れ出づる力が身と口と身の働きとなつて来る。喩へば電氣の力で機關を運轉するやうに、内に得たる靈的電力は恩寵に感激せられて、欣然として行動するやうになる。己を充實する靈力は無爲安逸を貪はる爲ではなく自我實現に働く爲である。

此電力は本は無限の水源より發現するもの、之を受くる機關は不斷に活動せねばならぬ。

我らは如來と合一せんに、自己を犠牲にせざるべからず。自己のすべてを献ぐべきである。己が迷妄の全部を献げ盡して大靈が全く顯現す。

大靈光に目覺めたる朝には苦痛紛擾等の闇黒はいつも消えて影も止めぬ。人間一切の紛擾は無智の妄想から現れたる妖怪であるから靈光顯はれ来る時には無くなつてしまふ。大慈愛に充された者は日々の凡てに細大となく如來の靈在を親切や道德秩序恩

惠の形を以て表はさうとしてゐる。

如來は一切萬物の中に天地萬物に悉く如來が一切に施す處の法性に慳惜なく萬物に惠を施してまた萬法を攝理したまふ。

我々は法性の分子であるから親は衆生心中に入る。我々の中にあつて共に働き共に善を爲してくださる。

人は自己の欲する所に随つて働くほど楽しい事はない。故に如來我に在つて共に働く。

我々が自己を圓滿に完成せんと欲するは、自己の靈格と力とを以て他の人々も同じく完成せん爲である。我々人と共に圓滿に完成するは共に永遠の安立を得んが爲である。

我如來の中にあり、如來我にあり。我々は常に淨土の樂園にありて、常に娑婆に働いて居る。

昭和二年九月廿八日印刷
 同 三十日發行
 誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
 年拾貳冊貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
 發行人 山崎 辨成

東京市小石川區若荷谷町九八
 印刷人 小林七太郎
 電話小石川一四九五

發行所 東京市小石川區水道端二ノ四四
 ミオヤのひかり社
 振替東京六八五一番